



フットサルFリーグ「エスポラーダ北海道」の元選手、吉田順省さん(札幌市豊平区)は、同市内の障害者支援施設で働きながら、知的障害のある生徒が通う道内の学校を訪ね、競技を教えている。やり方を「未だすれば、トップリーグの元選手も障害のある生徒も、一緒にボールを追うことができ。フットサルを通して障害への理解を深め、子どもたちに寄り添う社会になってほしい。かつてファンを沸かせた自称「イケメン」は、いまもコートに立つ。
(野呂有里)

ゴールは壁のない社会

フットサル元エスポ選手・吉田さん

「ドリブルは、ボールとお散歩することだよ。強く蹴ったら、ボールは離れちゃうからね」。7月中旬、札幌市中央区の札幌伏見支援学校の体育館で、吉田さんと生徒とのドリブル競争が始まった。生徒の体力や技術に応じ、吉田さんは走る距離を伸ばすなど、対等に勝負ができるようにルールを変えてくる。

「頑張れ!」。普段は他人と関わるのが苦手な生徒から、仲間を応援する声が上がった。吉田さんに傳差で勝ち、生徒同士でハイタッチをして喜び合った同校高等部2年の須藤明さん(17)は「すごく楽しかった」と汗をぬぐった。障害があるなしにかかわらずスポーツを楽しみ、チームワークの大切さを知り、友達になることもできる。「こうやって、壁のない社会ができるといいなって思っています」と目を細めた。

小樽市出身。小学7年でサッカーを始め、エスポラーダで2016年まで6季プレーした。自ら「イケメン」と名乗り、子どもたちのミニゲームで、ドリブル中にボールの上に乗ったり、靴ひもを結ぶふりをして隙をうかがったり。ユーモアたっぷりのプレーで人気を集めた。

入団翌年から、チームを支援す



「みんなを笑顔にしたい」。道内の特別支援学校の生徒にフットサルを教える吉田順省さん(中央)＝小室泰規撮影

障害者指導「楽しみ笑ってほしい」

る社会福祉法人「明日佳」(札幌)に勤め、障害のある人が行う清掃や調理の補助をしてきた。思うように仕事が進まない人もいるが、「苦手なことって、誰にでもある」と気にしない。むしろ「障害だから」と、周りが壁をつくっているだけ。生活を安定させようと就いた仕事だが、障害者が孤立しがちな現状を変えたいと思うようになった。

気分転換や健康づくりに生かしてもらおうと、施設内でフットサルを教えたことがきっかけとなり、2年前から学校訪問を始めた。明日佳の小野寺眞悟理事長(79)が運営する障害者スポーツの振興団体の一員となり、樺山管内今金町や十勝管内新得町などの特別支援学校延べ約20校の生徒と交流した。

今月2日には札幌市で団体主催の大会が開かれ、道内外の27校が参加した。バスをしたり、励まし合ったり、はつらつとプレーする「教えるたち」が頼もしかった。9月以降も年度内に6校を訪問する。「プレーする子も見ている人も、楽しみ、笑ってほしい」。障害のあるなしに関係なく、ボールを追う。ゴールは遠いかもれないが、応援の輪は広がると信じている。